

# 知的障害特別支援学校における 学級規模ポジティブ行動支援の効果

Keyword: 応用行動分析, 知的障害, チームティーチング, ポジティブ行動支援 (PBS)

## ポジティブ行動支援 (PBS: Positive Behavior Supports) とは?



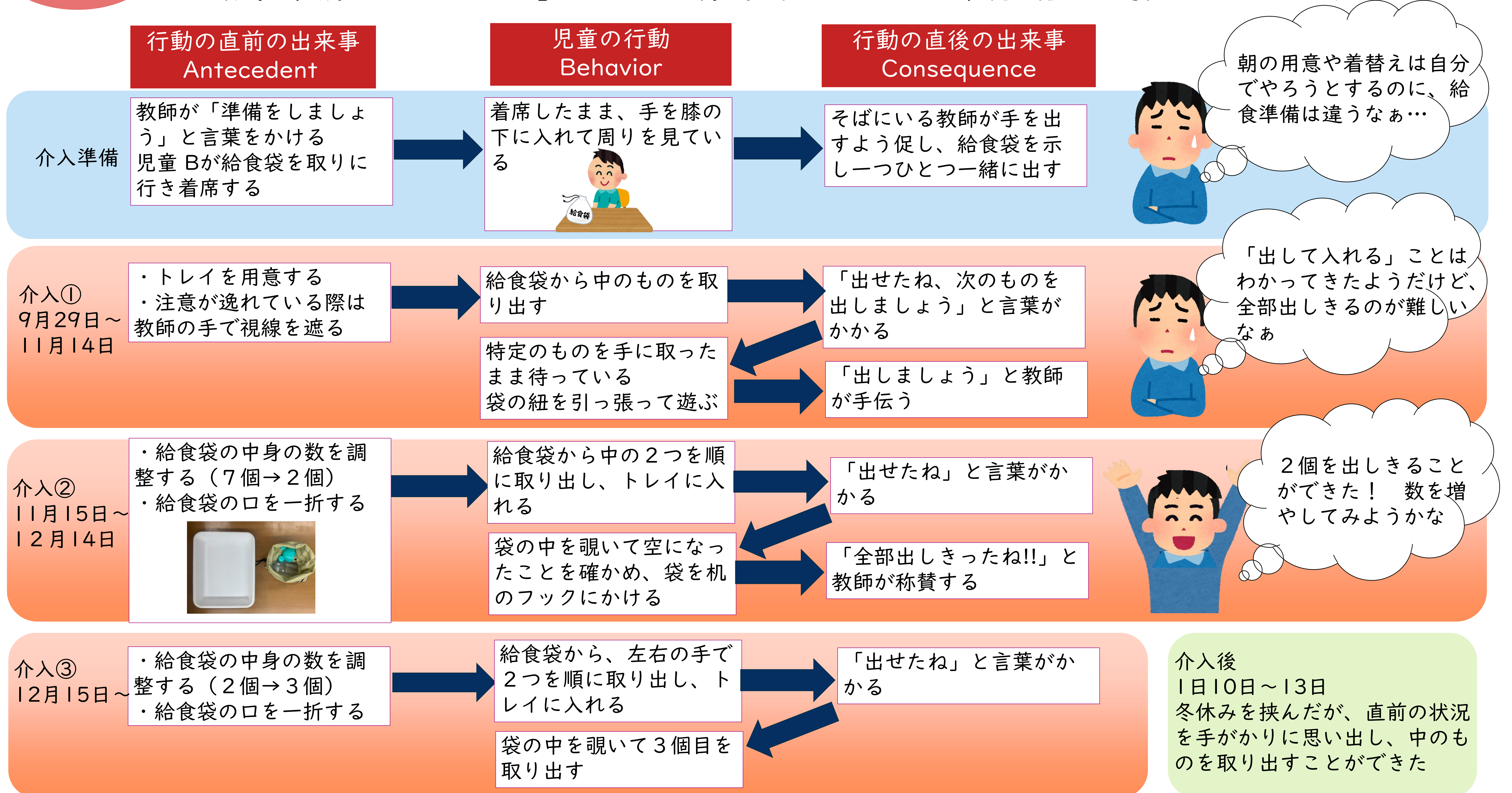
ポジティブ行動支援とは、適切な行動を価値づけ支援する予防的なアプローチであり、通常教育・特別支援教育にかかわらず「全員」を対象とする多層支援モデルである。米国において応用行動分析に基づいて開発され、その成果が多く報告されている。(栗原, 2018; 大久保・辻本・庭山, 2020)

**目的** 知的障害特別支援学校小学部1・2年生学級において、学級規模ポジティブ行動支援(PBS)を実践し、その効果を検証することをめざした。

**方法** 本校小学部1・2年生児童4名を対象とし、介入準備、介入期、介入後の3つのステップでポジティブ行動支援アプローチを実践した。具体的な4つの目標行動は、児童と決定した学級目標をもとに教師2名で選んだ。その行動を引き出し強化するための環境設定を工夫・改善した。

介入準備 (5月~8月)	介入 (9月~12月)	介入後 (1月)
①学級目標の決定 ②ポジティブ行動マトリクスの作成 (4つの目標行動の選定)	①目標行動を意識づける学級開きの実施 ②目標行動を引き出し強化するための手続き (AとCの工夫)	①長期休み明けの目標行動の観察・評価

**結果** 個人差はあったものの4つの目標行動どれもが増加し、長期休み後もその姿が継続した。ここでは他の児童と同じ介入方法では行動の得点に変化が現れにくい状況が続いた児童Bの「給食準備を一人でする」という目標行動について、環境調整の過程をまとめる。



## 考察

具体的な目標行動を定め、その行動を引き出すために教師間で環境調整 (AとCの工夫・改善) したことで、個人差はあるが目標行動の増加傾向が見られ、小学部1・2年生学級におけるポジティブ行動支援アプローチの有効性が示された。ただし、同じ環境をつくらなかった日は、介入前と同じように指示待ちの状態が見られ、児童が直前の環境設定 (A) を手がかりにして、行動 (B) していることが伺えた。低学年の段階では児童にかかわる身近な教師が情報を共有し、同じ環境を設定し「できた」という経験を積むことの大切さが明らかとなった。